

---

# 長門Limited

オオタユウヤ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

長門 Limited

### 【著者名】

オオタコウヤ

### 【あらすじ】

本当にありえるかもしいない？長門とキョンの純愛ラブストーリー

## (前書き)

この話はフィクションです。実在する個人名、団体名、その他固有名詞とは全く一切関係ありません。つそつぱぢです

「好きだ、長門！」

最初にその言葉を聞いたときは何かの『冗談だ』と思った。彼がわたしのこと好き、スキというのは人が人に好意があること伝えるときに使う『好き』なのだろうか？いや、そんなことはありえない。彼は涼宮ハルヒに選ばれた『鍵』なのだ。彼とわたしが結ばれる』とはあってはならない。よつてわたしはこの場では拒否の言葉を伝えなければならない。

なのに、何故わたしはこんなことを言つてしまつたのであるか

「…本当?..」

わたしの口から『拒否の言葉ではなく、確かめの言葉』がでてきたのである

「ああ、好きだ」

彼はもう一度、思いを云ってきた。今度こそ拒否の言葉を発しなければならない。

早く…拒否の言葉を…

「…わたしも…好き」

わたしの口からでてきた言葉は受け入れの言葉であった。なぜ、なぜなの先ほどからわたしの口から発せられる言葉はわたしの考えとは真逆の言葉。

なぜ…？いや、わかっている。わたし自身の個体がそう望んでいるからである。わたしは彼の思いを受け入れることにした。これは『涼宮ハルヒ』でも『情報統合思念体』でもなく、わたしか決めたこと。そう、わたしは誰のものでもないわたしのもの。わたしはわたしが望むがままに生きて行こう、そう思った。

次の日から、彼とわたしは行動を共にする機会がふえた。

昼休みになると彼は部室に来るのだ、その時点でわたしは読みかけの本に栞を挟み、彼と一緒に昼食をとるのだ。

放課後はSOS団の活動を終えてからわたし達以外の部員が帰ったのを確認して、一緒に帰っている。

あたり前だがわたしと彼が付き合っているといつことは周りの人間には伝えていない。万が一涼宮ハルヒにこのことがばれるわけにはいかないと、彼が提案したのである。わたしはその提案に賛成した。彼が言うようにもしこのことが涼宮ハルヒに知れればなんらかの『情報爆発』や『暴走』を起こすことが予測されていたからである。

彼は毎日わたしを家まで送ってくれる。その後彼はわたしの家にきて、とりとめもない話しをし、お茶を一杯飲み終えたころに帰つて行く。

休日の日に行われるSOSU団市内探索では、わたしの『情報操作』の能力を使い彼とわたしを同じペアにしている。

そのあとは図書館などに行き、時間を潰している。そんな普通の日常がわたしにとつてはとても幸せな日々であった。わたしは今まで涼宮ハルヒを『観察』するためだけに存在していた、それが彼とであつてから一気に豹変した、彼には本当に心から感謝している。彼のおかげでわたしは、今までなにも感じなかつた毎日を楽しいと感じている。

だがわたしはわかっていたこんな日々はそう長くは続かない……。だからわたしは少しでも長くこんな日が続いて欲しい、そう願つた

そんなわたしの願いは、もろくも崩れ去った。

それはある日の団の部屋

「ねえ、キョン、それと有希も」

「何だ？」

「何？」

「ちょっと変なこと聞いてもいい？」

「だから何だー。」

「えーと、これはあくまでわたしの勘なんだけれど、もしかしてあんた達付を合つてゐるんじや……」

ガタつ

扉を開け、古泉一樹が入ってきた

「よひ、古泉遅かったじや…………おこ古泉、その座我じりしたんだ

よー。」

古泉一樹は全体に包帯を巻いていた

「古泉くふじうしたの、ひどこ恼我じやない」

「なに、少々交通事故にあつてしまこまして。ですが見ためほゞた  
いした怪我ではないですよ」

「交通事故つてお前、今日はまだ帰つたまつが良いんじやないか?  
なあハルヒ」

「やうね、古泉くふあなたは今日は家でじつ休養しなさい。こ  
れは団長命令よ。」

「それで何の言葉に甘えて今日は休ましていただきましたよ。その  
前に長門ひと、少しのお話しがあるのですが、よろしこでしょうか?」

「何?」

「...」

「...わかつた」

わたしあは古泉一樹に連れられ非常階段までやつてきた

「...」

「やつはひで古泉一樹は喋りだした

「実は」の怪我は交通事故でしたのではないのです

「…閉鎖空間」

「話しが早くて助かります。そういうこの怪我は閉鎖空間にて神人によりてあたえられたものです」

「」最近、閉鎖空間の出現率が急激に増えてきています。その理由あなたは「存じのはずです」

「……」

「おや、知らないとは言わせませよ」

「こいつから?」

「それはあなたと彼の関係をいつから知っていたのかといふことですね?」

「……」

「」最近ですよ。あなたが情報障壁を展開していたおかげで少々てこづりましてね。ですが『機関』をあまり甘く見ないほうがいいですよ」

「前フリはもういい」

「やうですか。では本題に入ります」

「彼の」とはあきらめていただきませんか？」

「いやだと言つたら?」

「……実は今日僕は『機関』の命令で来たわけではないのです。『機関』はもうあなたが彼をあきらめるつもりはないと思い、強行策にでるつもりです。僕がなんとか説得しているのですが、もう時間の問題でしょう。ですから僕は『機関』の命令ではなく、SOS団の親しい友人としてあなたにお願いします。彼のことはあきらめてください、このままでは『機関』はどんなてを使ってでも、あなた達の仲を切り裂くでしょう」

「……わたしが守る」

「あなたが強いのは知っています。知っているからこそ『機関』も本氣で来るでしょう。

そんな中であなたは彼を必ず守りきれると言い切れますか?先ほどもいいましたが『機関』をあまり甘く見ないほうがいいですよ。『機関』はかなりの大組織です、数でこられたらいくらあなたでも限界が来るでしょう。そうなつたら彼は傷付きます。いえ、下手したら死ぬこともあります。あなたはそれでも良いのですか?

「……少し……考え方せて」

「ですがあまり時間はありません。もって…3日といつとこりです。それまでに決着をつけて下さい」

「……わかった」

「それでは僕はもう行きます」

そう言つと古泉一樹は出口に向かつて歩きだした……ふいに古泉一

樹は振り返りわたしに言った

「長門さん、あなたにばかり辛いやくめを押し付けて本当に申し訳ないと思っています」

「…………あなたは悪くない」

そう古泉一樹は何も悪くない。もしわたしが何かを恨むのだとしたら彼を愛してしまったわたし自身の心なのであるう

「…………ナ…ガト……長門ッ！」

わたしはその声で我に帰った。ふと見ると、彼が心配そうな顔でわたしを見ている。そうだ、今わたしは彼と一緒に下校している途中だった

「何？」

「いや、ぼーっとしてるから大丈夫かなって」

「大丈夫」

「たいしたことではない」

「そつか」

そんな会話をしているうちにわたしの家の前までついた。

「今日は用事があるから」これまで歸るよ」

一  
九

「いやあ明日また学校で」

そういひつゝ彼は歩をだした。

彼が行こうとしてゐる所へ思ひ出してもたゞでしらぬくなり

待てッ！」

なぜ彼を引き止めたのだろう  
気がつくとわたしは彼を引き止めていた。

わたしはまだ迷っているのであるうか。

いや、もう結論はでている。わたしは決着をつけるために彼を引き止めた…

わたしはこの恋に決着をつけようと思つ……

「…わたしの家」

「よつて行けり」とか?でも今日は用事が…

「……」

「…と思つたがやつぱつよつて行けりかな」

俯いていたわたしの心中を察しつてか、彼はそつまつてくれた。  
そんな彼の優しさにふれていこと決心が揺るぎやうにならぬ

だけどわたしは決着をつける。

世界のために?いや、彼のため、そしてわたしのためにも…

わたしと彼は今わたしの家にいる

彼はわたしのだしたお茶をすすりながら沈黙を保っている。何を話せばいいかわからないと言った様子だ

いつもして永遠に続くのか、といつ沈黙をわたしは破った

「…あなたにお願いがある」

「なんだお願ひって」

わたしは彼の隣まで行って、顔を突き出して言った

「…キス…して」

「なつ、本気か」

「あなたはわたしのことが好き?」

「そりゃ好きだけど」

「なら……いい」

「でも」

彼はそれ以上言葉を発せなかつた。

なぜか、わたしの唇が彼の唇をふさいでいたからである

ほんの10秒ほどのキス、唇を離すと彼は顔を赤面させていた

「な、長門いきなり…」

わたしは顔を突き出しそうに言つた

「次はあなたからわたしにキス……して

「いいのか?」

「いい」

「長門」

この夜、彼とわたしは結ばれた

深夜

彼は疲れてわたしの膝の上で眠っている

なぜあんなことをしたのだろう

わたしは考え、結論をだした

絆が欲しかったから。

彼とわたしの確かな絆が欲しかったのだ

これで思い残すことはなにもない

「…………ッ！」

わたしはいつのまにか泣いていた

なぜ？わたしは彼と出会ったことを後悔している？

……いや、わたしは彼と出会ったことも、彼を好きになつたことも何一つ後悔していない

じゃあなぜ？

なぜわたしは泣くの？

何度も解析しても理由がわからない

理由なんてものは無いのかもしれない

ただ泣きたいから泣くそれだけなのかもしれない

わたしにとって彼は運命の人だった  
だけど彼にとって、わたしは運命の人ではなかった

ただそれだけだ

「さよなら…………わたしの運命の人」

わたしは彼の記憶を消した

長門  
L i m i t e d

E  
N  
D

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3898d/>

---

長門Limited

2010年10月15日00時21分発行